

# 池田大作の日韓対話：平和を内包した幸福思想の展望

三浦大樹(韓国国立ソウル大学)

呂菊喜(韓国慶熙大学)

## 1. はじめに

韓国において、創価学会や池田大作に関する本格的な研究は1990年代に始まり、その注目度は増しつつあるといえる。筆者らが調べた限りでは、累計で約60本の学術論文、5冊の研究書が確認でき<sup>1</sup>、その主要な領域や流れとしては、新興宗教団体としての創価学会の発展要因や独創性に関する宗教学・宗教社会学的なもの、平和・文化・教育等の特定分野に関する人文・社会科学系のものに大別できる。それらが同時進行し、研究が全体的に発展しているが、むしろそれぞれが「部分」に過ぎないという限界も露呈しつつある。このような動向に対し本報告は、日韓対話・日韓関係に焦点を絞って池田思想の特徴を再検討し、また、日本の関連研究と対比することによって、それら個々の流れの相互補完や発展を促すカギを探究することを目的とする。その際、本稿は特に、誰もが主張する「平和」以上に、民衆の幸福こそ目指すべき目標であると強調する「平和を内包した幸福思想」という特徴が池田の日韓対話の中に見い出せるということを議論の中心とする。

本論は3部構成とする。第1部では、重要な背景として、韓国における創価学会(韓国SGI)の登場と発展を簡潔に紹介し、それに沿って展開している創価・池田研究の主要な流れを詳細に分類し、その特徴と課題を指摘する。第2部では、日韓対話・日韓関係を素材に池田思想の特徴を再検討する。方法論的には、関連する彼の主張の全体から、特に重点的に論じられたものとして、日韓関係の根本的問題と本質的ビジョンを取り上げ、その日蓮仏法や創価学会の教義・信仰との関連性、および、韓国の識者との現実的な合意点についても留意することによって、思想的特徴をより深く描く。その結果を要約すると次の通りである。池田は、政策的・中長期的な観点から日韓間の歴史的和解や地域秩序の安定等、個別問題を議論することもあるが、それ以上に、精神的・超長期的な観点から、その根本的問題と本質的ビジョンを貫く深層の動態にアプローチしている。つまり、近現代の日韓関係の悪化の根本的要因とは人間・生命を尊厳する思想・哲学の不在や低発展に起因する差別意識であり、その思想の実質的な回復や具現、具体的には日韓民衆がそれぞれに、また連帯して、自他共どもに幸福になろうとする能動的な生き方を目指すことが日韓関係のビジョンである。また、そのような価値を最も深く説いた日蓮思想の国際的展開の第一歩として、日韓民衆の連帯は世界平和へのモデルにもなるとの考えである。第3部では、このような思想的解釈が韓国での創価・池田研究の展開に対して与える意義、特に、分離しつつある各流れの相互補完や革新をどのように促すかについて、多角的に考察する。同時に、この解釈から派生する課題として、創価・池田思想において幸福と平和の関係をどう理解すべきかという、より一般的な問題提起をすることで議論を締めくくる。

## 2. 韓国における創価学会の発展と創価・池田研究の5つの流れ

韓国において創価学会は1960年代初期に広まり始めた。ただ、在日韓国・朝鮮人や日本に住む家族や知人等を通して済州やソウル、大宅等の各地域ごとに信仰グループが散在する形となった<sup>2</sup>。ところが、その急速な発展に対し、1964年1月、韓国政府は日本の国家主義に追従する邪宗として布教禁止の方針を発表した。これは主に当時の朴正熙政権の政治的思惑による<sup>3</sup>。日本からの財政支援を重視し

<sup>1</sup> 研究論文は韓国内での学術雑誌掲載論文および単行本収録論文を含む。学術書には韓国SGI発行の紹介書籍等は含めない。その他にも月刊誌・新聞の特集記事や修士論文なども多数確認できる。

<sup>2</sup> 韓国での創価学会の登場と展開に関しては多くの韓国語文献で詳細に整理されている。代表的なものとして朴承吉『현대한국사회와 SGI: 한국SGI와 대승불교운동의 사회학(現代韓国社会とSGI: 韓国SGIと大乘仏教運動の社会学)』(テイル、2008年)がある。日本語文献としては趙誠倫「韓国SGI運動の歴史と現況: 朴政権下の苦難時代を中心に」『SOCIOLOGICA』42巻1-2号; 李和珍「韓国SGIの展開と現況」宗教情報リサーチセンター編『海外における日本宗教の展開: 21世紀の状況を中心に』(2019年)。

<sup>3</sup> 趙誠倫『1964년: 어느 종교 이야기(1964年: ある宗教の話)』(ダンサン書院、2019年)。この日本語訳は趙誠

て日韓外交正常化を推進すること対し、国民的な反政府運動・反日運動が起きたのだが、その目をそらすためのスケープ・ゴートとして創価学会を利用したのである。これに多くのマスコミや一部の学者・宗教関係者らも同調した。この問題は1969年10月の大法院(最高裁判所)の判決により、信教の自由は認めるが政府の対応は容認するという中間的な決着を見た。この事件で生じた「社会的レッテル」がその後韓国SGIを苦しめることになったが、実際には草の根の布教活動はより勢いを増し、日本の創価学会との関係も強まり、分散していたグループは1974年に韓国日蓮正宗仏教会としてまとまった。会員数に関しては、1970年代末には50万人、1980年代末に80万人、1996年には100万人を超え、2003年には約150万人に至った<sup>4</sup>。70年代から全国的なボランティア運動としての国土大清掃運動や環境保護運動、図書贈呈運動、平和文化祭等を展開し、90年代からは大学生によるキャンパス平和文化活動、2000年代に入ってから小中高生対象の文芸祭等を毎年開催した。2000年4月には財団法人韓国SGIとして政府より認可を受けた。これらにより「完全ではないものの、そのイメージは徐々に変貌した」と広く見られている<sup>5</sup>。それを証明する一つの指標として、SGI会長の池田に対して国内自治体からは82の名誉市民証、国内高等教育機関から20の名誉学術称号、その他各種機関から214の顕彰・感謝状等が贈られた<sup>6</sup>。2009年には国家勲章である花冠文化勲章も贈られた。2018年に政府がまとめた宗教調査によれば、内国人の約43.9%が何らかの宗教を信仰し、仏教が15.5%、プロテスタント約19.7%、カトリック約7.9%であるが、この中で信徒数約150万人を公称する韓国SGIは人口比3.2%を占め、国内でも有数の宗教団体となった<sup>7</sup>。創価学会の国家別規模としては日本に次ぐものである。全国に350の地域文化会館を設置し、「日蓮仏法に基づき、社会の中で平和・文化・教育運動および隣人のための社会貢献活動を活発に展開し、幸福の価値を創造する大乘仏教団体」として成長している<sup>8</sup>。

これらを背景として、韓国において創価・池田研究が展開した。冒頭で紹介した2つの大きな流れの中で、宗教学・宗教社会学の研究は方法論的に異なる3つの流れに細分化でき、平和・教育・文化等に関する個別的研究の中でも、平和に関してはある程度まとまって発展している。以下に、これら5つに渡る細部の流れを、代表的な既存研究と共に要約する。

1つ目は、60年代に登場した誤解や偏見とは距離を置き、「創価学会とは何であり、なぜ韓国内で発展したのか」を解釈・叙述的に説明する、宗教学・宗教社会学の基礎研究である。具体的に1990年代から日本系の新宗教に関する学術研究が発展したのだが、その一環として韓国SGIも取り上げられ<sup>9</sup>、先駆的な研究が1994年の朴承吉論文および著作としてまとめられた<sup>10</sup>。彼は日蓮仏法とその実践的教義を整理し、牧口に始まる創価学会の主要な歴史や日蓮宗との分離等を詳細に紹介した。後続の研究

---

倫『韓国1964年：創価学会の話』（論創社、2024年）。

<sup>4</sup> 韓国SGI広報局の資料を基に研究者が公表した統計である。趙誠倫『前掲書』185項；李元範・南椿模『한국속 일본계 종교의 현황(韓国の中の日本系宗教の現況)』（木旺社、2008年）136-137項。

<sup>5</sup> 李元燮2020「한국 창가학회의 내외적 갈등의 역사적 이해: 절복 개념을 중심으로(韓国創価学会の内・外的紛争の歴史的理解：折伏概念を中心に)」『宗教学研究』38号74-75項

<sup>6</sup> 韓国SGIホームページ「大韓民国顕彰」<https://www.ksgi.or.kr/ikeda/certification/certification2.ksgi>。

<sup>7</sup> (韓国政府)文化体育観光部『宗教実態調査2018』(2018年)91項、99-122項。宗教別人口は人口センサス、宗派別信徒数は個別の団体調査によるものであるため、両者の結果には違いがある。団体調査の結果として信徒数100万人を超える宗教団体・宗派としては、大韓イエス教長老会(2700万)、キリスト教監理会(1330万)、大韓仏教曹溪宗(1200万)、大韓仏教太古宗(600万)、カトリック(580万-韓国教区全体)、大韓仏教天台宗(250万)、大巡真理会(160万)、円仏教(120万)、大韓仏教総和宗(119万)、大韓仏教観音宗(110万)である。

<sup>8</sup> 韓国SGIホームページ「紹介」<https://www.ksgi.or.kr/cgi/koreasgi/koreasgi01.ksgi>。150万人を超えた2003年前後から韓国SGIは公開的な会員数情報の更新を行っていないようである。

<sup>9</sup> 韓国には日本から天理教・本門仏立宗・キリスト教同信会・日蓮正宗・立正佼成会・PL教団・霊友会等が流入し、その中で創価学会は圧倒的な規模として注目された。2003年の日本系新宗教に対する実態調査では、19教団に約200万人の信徒が属することが確認されたが、その内75%が創価学会員である。李元範他『한일 종교의 상호 수용실태에 관한 조사(韓日宗教の相互受容実態に関する調査)』（報告書、2005年）。

<sup>10</sup> 朴承吉「일본 신종교의 이해(日本新宗教の理解)」金鍾瑞・朴承吉・金洪喆『현대신종교의 이해(現代新宗教の理解)』（韓国精神文化研究院、1994年）155-240項；朴承吉「창가학회의 국내 성장과 그 의의(創価学会の国内成長とその意義)」『宗教学研究』10号(1994年)。

も含め、特に宿命転換や、師弟不二・聖俗不二、地湧の菩薩としてのアイデンティティーや絶対的幸福等をその独特な思想として注目した<sup>11</sup>。2008年には『現代韓国社会とSGI』とのタイトルで単行本を出版した。これは創価学会の沿革や歴代会長の思想、中心的教義、韓国SGIの歴史と活動等、広範囲な内容を含む。朴承吉以外にも宗教学・宗教社会学における創価基礎研究は今も進んでいる<sup>12</sup>。

2つ目は、基礎研究の流れから派生した、宗教学・宗教社会学の実証的研究群がある。代表的には、李元範を中心とした一連のプロジェクトが挙げられる<sup>13</sup>。彼らは2000年代に入ってから2度にわたり、韓国内の日本系新宗教に対する大規模な実態調査を行い、韓国SGIに対しても約1000名をサンプルとして調査した。その結果として、特に創価学会員は他宗教よりも入信後の生活満足度や信仰心の水準が高い点を確認し、複数の論文を通してその主要な発展要因を次のように挙げた<sup>14</sup>。1) 即効性のある現世指向主義、2) 単純明快な宗教実践、3) 和光新聞(聖教新聞の韓国版)の配布等のきめ細かな布教活動、4) 家族の中での祖母や母、妻、姉等の女性からの布教の影響、5) 小グループとしての座談会の活用、6) 組織的かつ現地化した人材育成システム、7) 戸田や池田が進めた「形式からの脱皮」等である。調査に参加した諸点淑は結論として、韓国SGIは既存の仏教やキリスト教とは異なる宗教的価値観を持ち、「座談会や体験談・唱題等を通して会員自らが人生の重要性を生活の中で認知し、平和な人生を希求する意志が何よりも強い」と指摘した<sup>15</sup>。また、調査メンバーの金炫石は2022年に、韓国SGIを正面から扱った最初かつ唯一の博士学位論文を発表した<sup>16</sup>。同論文で彼は「韓国SGI総論」を目指し、日本及び韓国での創価学会の展開や3代会長の思想と行動、そして上記調査に基づく会員の実態分析結果と全国の文化会館の活用状況等を網羅した。

3つ目は、創価学会の思想や運動を別の理論的観点から創意的に再解釈する宗教学・宗教社会学上の発展的研究である。主要なものを挙げると次の通りである。1) 上記した朴承吉は韓国SGIが公共的宗教(public religion)へ変容していると見ている<sup>17</sup>。これは宗教社会学においてホセ・カサノバ(J. Casanova)らが主張する概念であり、現代社会の変化に伴い、伝統的な宗教がもはや私的領域に留まらず、公共的問題や公共的価値へと関心と関与を拡大し、政治や経済の道德化を促すというものである。彼は韓国SGIの平和・文化・教育活動がまさにこの概念に該当し、これに対する池田の役割を転換的リーダーシップ(transformative leadership)として評価した。2) 金溶煥は多くの論文を通して、SGIを「幸福協創」の組織と見ている<sup>18</sup>。それは現代社会において個々の生命をより良く活かす「活命連帯」を推進し、公共哲学(public philosophy)で言うところの「活私開公」(単なる共同的価値の追

<sup>11</sup> 朴承吉「창가학회의 차별화와 사제불이 이념의 사상사(創価学会の差別化と師弟不二理念の思想史)」『日本思想』12号(2007年)。朴承吉「창가학회재가주의 불교운동의 확립과정과 그 의미(創価学会在家主義仏教運動の確立過程とその意味)」『宗教研究』77集3号(2017年)134-137項。

<sup>12</sup> 朴奎泰「창가학회에 대한 일고찰: 불교혁신운동의 측면을 중심으로(創価学会に対する一考察: 仏教革新運動の側面を中心に)」『宗教学研究』20号(2001年)；伊藤貴雄「한국SGI 조직이 과거, 현재, 미래: 인간혁명의 종교, 관성유포를 위한 조직(韓国SGI組織の過去・現在・未来: 人間革命の宗教、広宣流布のための組織)」『新宗教研究』41集(2019年)。

<sup>13</sup> 李元範・朴承吉・趙誠倫・南椿模・諸点淑・李賢京・車次錫らであり、2015年の調査には金炫石も加わった。

<sup>14</sup> 車次錫「한국내 일본계 법화교단의 수용실태와 토착화 요인(韓国内の日本系法華教団の受容実態と土着化要因)」『仏教学報』44号(2006年)；李賢京「韓국의 宗教市場과 일본의 新宗教: 韓国創価学会(KSGI)을 事例として」『日本近代研究』21集(2008年)；李元範・南椿模「組織社会学的観点から見た日経新宗教教団の小集団活動: 小集団活動としてのKSGI座談会の分析」『日本近代学研究』16集(2007年)；諸点淑「국내 일본 신종교 신자의 라이프 스토리에 나타난 입신 과정과 신앙의 시작: 한국SGI 회원 사례를 중심으로(国内日本新宗教信者のライフ・ストーリーに表れた入信過程と信仰の始まり: 韓国SGI会員の事例を中心に)」『比較日本学』58集(2023年)。調査結果の一部を日本の学術誌に掲載したものもある。李元範・南椿模「韓国における日本系宗教信者の意識と態度変容に関する調査」『宗教と社会』12号(2006年)217-230項。

<sup>15</sup> 諸点淑「한국SGI 회원의 종교적 가치관과 생활 만족도에 관한 연구(韓国SGI会員の宗教的価値観と生活満足度に関する研究)」『大東文化研究』120集(2022年)365項。

<sup>16</sup> 金炫石『한국SGI 종교조직과 활동에 관한 사회학적 연구: 조직화 과정과 문화회관의 활동을 중심으로(韓国SGIの宗教組織と活動に関する社会学的研究: 組織化過程と文化会館の活動を中心に)』(博士論文、2022年)。

<sup>17</sup> 朴承吉『前掲書』(注2)。

<sup>18</sup> 代表的論文として金溶煥「한국SGI의 공공행복 연구(韓国SGIの公共幸福に関する研究)」『宗教研究』77集2号(2022年)。

求ではなく、個々人の変革や智慧を通して、公共的価値を新たに創造すること)を実践していると指摘した。3) 金鐘萬は池田思想を宗教的エコロジー思想の代表的事例として注目している。西洋における二つの生態神学(ecotheology)の傾向、つまり自然を道具と見る人間中心主義と、キリスト教を中心に諸宗教や人間の質的違いを論じる神中心主義に対する第3の思想として、生命次元の平等や開かれた宗教を目指す池田思想に注目している<sup>19</sup>。

4つ目は平和・文化・教育等の個別分野の中で、特に平和に注目する包括的研究である。1) 朴祥弼は池田平和思想を現代平和学で言う積極的平和概念、すなわち「武力を使用した戦争や紛争の不在のみならず、自由・人権・福祉・環境等に対する保障を通して実現する安楽な生活状況」の枠で認識した上で、SGI平和提言のテキストをデータとしたキーワード分析を通して、具体的に社会的倫理観が最も重要視されている点を解明した<sup>20</sup>。2) 金銖甲もまた積極的平和の観点からアプローチし、池田思想は戦争の不在だけでなく、身体や心・靈魂の状態としての内的平和、そして地球上の全人類および国家の幸福・自由・平和が保障された理想的な状態を目指すものと見た<sup>21</sup>。3) 吳永達は池田思想の中で特に平和の重要性に注目し、その特徴を法華経で説く一念三千論や十界互具論、そしてインド・ギリシャ哲学における唯識学等に基づく人間論を基盤とする「人間主義」とし、それは「究極的に人間の共同体である国際社会において、人間生命の尊重を通じた平和の成취を目指す」点において、韓国の慶熙大学創立者である趙永植の「人間中心主義」に通じると結論した<sup>22</sup>。これら以外にも関連研究は多くあるが、やはり積極的平和のような多元的な平和観を池田思想の核心的内容として扱う傾向がある<sup>23</sup>。また少数ではあるが、創価学会が母体となり設立された公明党を題材とする研究でも王仏冥合や中道概念等を創価・池田の平和思想の特徴として列挙する研究もある<sup>24</sup>。

5つ目に、文化・教育分野の研究が挙げられる。これらはSGIが日本や韓国および世界で文化・教育活動を展開したり、地域社会で「文化会館」を設置していること、またオン・オフライン上での様々な書籍や映像、イベント等のコンテンツを配信している点等に注目し、その基盤として牧口・戸田・池田の文化・教育思想を関連付けている<sup>25</sup>。また、法華経や日蓮仏教そして環境・共生問題等の理解

<sup>19</sup> 金鐘萬「종교생태사상에 대한 시론적 연구: 이케다 다이사쿠의 생태인식을 중심으로 (宗教生態思想に対する試論的研究: 池田大作の生態認識を中心に)」『新宗教研究』42集(2020年)。

<sup>20</sup> 朴祥弼「이케다 다이사쿠의 평화사상의 배경과 평화실현 방법 (池田大作の平和思想の背景と平和実現方法)」『日本研究叢書』45号(2017年)。

<sup>21</sup> 金銖甲「평화추구의 사상과 실천 (平和追求の思想と実践)」2024年趙永植・池田大作平和フォーラム。

<sup>22</sup> 吳永達「미원조역식과 이케다 다이사쿠의 평화론의 사상적 기초: 인간(중심)주의를 중심으로 (美源趙永植と池田大作の平和論の思想的基礎: 人間中心主義を中心に)」『OUGHTOPIA』37卷1号(2022年)。

<sup>23</sup> 河映愛「조영식과 이케다 다이사쿠의 평화운동실천의 비교연구 (趙永植と池田大作の平和運動の実践に関する比較研究)」『平和学研究』16卷5号(2015年); 林正根・三浦大樹「이케다 다이사쿠의 평화사상과 지속가능 개발 (池田大作の平和思想と持続可能な開発)」『人文社会21』7卷4号(2016年); 劉光錫「한국창가학회와 국제창가학회의 평화주의에 대한 비교연구: 종교유형론적 관점에서 (韓國創価学会と國際創価学会の平和主義に対する比較研究: 宗教類型論的観点より)」『新宗教研究』46号(2022年); 權贊皓「전환기 세계 평화 구축을 위한 리더십의 방향과 과제 (轉換期の世界平和構築のためのリーダーシップの方向性と課題)」2024年趙永植・池田大作平和フォーラム。

<sup>24</sup> 白昇憲『종교정당 공명당과 중도주의 (宗教政党公明党と中道主義)』(トゥナム、2002年); 趙誠倫「헐거운 브레이크: 창가학회와 공명당의 관계 (ゆるいブレーキ: 創価学会-公明党関係)」『宗教文化批評』29集(2016)。

<sup>25</sup> 俞在永「이케다 다이사쿠의 평화교육에 대한 고찰 (池田大作の平和教育に対する考察)」河映愛編著『조영식・이케다 다이사쿠의 평화사상과 계승 (趙永植・池田大作の平和思想と継承)』(韓國學術情報、2018年); 孫希姪「이케다 다이사쿠와 도쿄후지미술관 (池田大作と東京富士美術館)」河映愛編著『前掲書』; 三浦大樹「이케다 다이사쿠의 문화사상: 인간과 사회의 내재적 변혁 (池田大作の文化思想: 人間と社会の内在的変革)」『사회사상과 문화 (社会思想と文化)』23 卷 3 号(2020 年); 李允眞・金南淑「마키구치의 소카교육론에 대한 연구 (牧口の創価教育論に関する研究)」『教育問題研究』70 号(2019 年); 諸点淑「일본 신종교의 문

を深めるために、彼らの思想を活用する研究、つまり間接的な創価・池田思想研究も増えている<sup>26</sup>。

以上、韓国での創価学会の拡大を背景に、5つの学術的流れが細かく形成されていることを整理した。韓国宗教学会では2015年以降、毎年の学術大会にSGI分科を設け、また2016年には、慶熙大学の教員らが「趙永植・池田大作研究会」を設立し、韓国SGI学術部と共に毎年学術行事を開催している。これらを機会として、少なくとも毎年3-6編程度の創価・池田研究が発表されている。このような研究動向の全体的な特徴を次に再整理する。1) 発展の順序から見れば、創価研究の土台の上に池田研究が展開し、現在では両者が同時進行している。このような状況は日本や中国での展開とは少々異なる。特に、創価研究が活発であるにも関わらず、日本にあふれている反創価学会的な書籍や偏見はほとんど参考にされていない。これには1960年代の政府とマスコミが一体となった政治的弾圧に対する反省が活かされているとも言える。2) 「思想」というキーワードの扱いが少々異なる。国際的な研究動向として、様々な分野での池田の主張や運動を集約して、それらを「思想化」する試みが「池田思想研究」として展開しているようであるが、創価研究が先行する韓国では「日蓮思想」の純粋な現代的実践者としての創価学会の実態や池田の「リーダーシップ」に注目する傾向がある。3) ともあれ、全体としての創価・池田研究の量的側面においては、日本や中国および英語圏には全く及ばない水準である。日蓮・牧口・戸田等の思想の源流的研究は特に進んでいない。このこともまた、創価・池田研究の未分化や信仰・思想・リーダーシップが混在する一因であろう。

韓国内での今後の研究課題や可能性はもちろん多岐に及ぶが、特に次の点を指摘できる。1) 創価研究と池田研究の相互補完性の強化、2) 全体像としての創価・池田思想の体系化の試みおよびこれに必要な研究の裾野の拡大、3) 韓国での研究としての独自の意義の探求である。敷衍するならば、既存研究は様々な分野・領域への発展という点で大きな成果を挙げているが、それは裏を返せば、効果的な相互基盤や全体像が欠けているために、むしろ、それぞれの解釈の限界や混在性を相互に際立たせていると言える。「群盲像を評す」ような状態である。相互補完性や全体性に関する議論がある程度固めた上で、なぜ韓国においてこの主題に対する研究が必要・重要であるのかについて、より深めていくべきであろう。以下、次節において池田思想の特徴を本稿での方法論により再解釈した上で、最終節において、このような既存研究の問題点と今後の課題に関し、再び立ち戻ることとする。

### 3. 池田大作の日韓対話と日韓関係観：根本的問題と本質的ビジョン

#### (1) 日韓対話の全体像と主要テーマ

池田は「兄の遺言であった中日友好」活動をより広げる文脈において、「父の念願であった韓日友好」活動を1980年代末に開始した<sup>27</sup>。韓国への訪問は3度であり(1990年9月、1998年5月、1999年5月)、それと前後する形で多くの韓国識者と対談した。大学や自治体からの学術称号や名誉市民証等の授与も1990年代後半から急増した。ところで、韓国・朝鮮半島の歴史や文化に関する池田の発言や考察自体は1960年代に始まり、小説や随筆・挨拶等に記されている。1983年に始まったSGI平和提言でも、朝鮮半島問題は主要テーマとして持続的に取り上げられた。何よりも、1960年代からその逝去に至るまで、在日韓国人、留学生、在韓日本人、そして韓国SGI会員らに対して無数のメッセージを送り続

---

화사업과 콘텐츠: 일본 창가학회의 활동을 중심으로(日本新宗教の文化事業とコンテンツ:日本創価学会の活動を中心に)』『新宗教研究』39集(2018年)。

<sup>26</sup> 鄭榮植「한일 양국의 근대불교와 신흥종교의 성립에 관한 비교연구: 법화경신앙을 중심으로(韓日両国の近代仏教と新興宗教の成立に関する比較研究:法華經信仰を中心に)」『한국사상과 문화(韓国思想と文化)』46号(2009年); 朴鍾茂「21세기 문명과 동아시아: 한중일 3국과 생명존엄(21世紀文明と東アジアの精神文化:韓中日3国における生命尊嚴)」河暎愛編著『문화세계의 창조와 세계시민(文化世界の創造と世界市民)』(韓国学術情報、2022年)。環境分野で池田思想を活用したものとして鄭世喜「평화를 향한 한반도의 지속가능한 개발: 환경인식과 행동의 공유(平和に向けた朝鮮半島の持続可能な開発:環境認識と行動の共有)」河暎愛編著『조영식·이케다 다이사쿠의 생태문명과 평화운동(趙永植・池田大作の生態文明と平和運動)』(韓国学術情報、2023年)。

<sup>27</sup> 国立韓国教員大学権彝赫総長との対談(1987年1月31日)『인간혁명의 세기로: 이케다 다이사쿠 선집(人間革命の世紀へ:池田大作選集)』(中央日報J&P、1999年)17項。

けてきた。これらが全体として「池田の日韓対話」を形成していると言える。

具体的には、対談集を出版したのは趙文富(元済州大学総長)1人であるが<sup>28</sup>、対談内容が随筆や新聞記事として掲載された人物としては、趙永植(慶熙大学創立者)・李壽成(元首相)・李寿晤(昌原大学総長)・権彝赫(国立韓国教員大学総長)がいる。その他にも李建熙(サムスン・グループ会長)・申鉉礪(元首相)・鄭宗澤(忠清大学学長)・済州大学や慶熙大学の訪問団とも懇談した。また、その著作を池田が詳しく紹介し、書簡の交換や出会いがあった人物として、李御寧(作家、文化部長官(文部大臣))・趙廷來(作家)等がいる。それらを土台として池田は、韓国の自然・地理や歴史・文化を地方レベルに至るまで細かに認識し、5つの長編詩で繊細に謳っている<sup>29</sup>。挨拶や随筆等で言及した韓国・朝鮮半島の歴史的人物は約20名に及ぶ<sup>30</sup>。これら対談・挨拶・人物考・詩・提言等の特集した本や小冊子が韓国語でいくつも翻訳・発行されており、韓国国内において「池田の日韓対話」の文献は既にある程度まとまっている<sup>31</sup>。

内容を全体的に見渡すと、池田の日韓対話は大きく4つのテーマに分けられる。1) 日本との関係性または日本人への教訓を念頭に、韓国・朝鮮半島の歴史・文化・社会等を論じたもの、2) 世界平和を構築する上での韓国・朝鮮半島問題や日中韓の地域的協力等の重要性を論じたもの、3) 韓国の歴史上の人物や出来事等の紹介を通して、正義・勇気・団結・智慧等の普遍的に重要視すべき人格や価値観を論じたもの、4) 世界市民や日蓮仏法の信仰者としての、個人や組織・地域の成長を激励したものである。より大きく見るならば、世界平和の中での日韓の課題や役割を広く論じたものと、普遍的価値や信仰に関するものとの分類できるが、一つの挨拶や詩の中にこれらすべてが圧縮している場合もある。以下に、そのような重複性を手掛かりに、池田の日韓対話のエッセンスを抜粋する。

## (2) 池田の日韓関係観：根本的問題と本質的ビジョン

池田は日韓関係に関し様々な政策的議論を展開し、刻々と変わりゆく世論も注視しているが、それ以上に掘り下げているのは「近現代の日韓関係を悪化させた根本的問題」である。これに関し彼は、日本社会に繰り返し蔓延してきた、アジアに対する「差別意識」を一貫して主張してきた。

“現在、韓国と日本の間に横たわっている問題は、一面では、二十世紀の人類全体が残してきた問題の縮図と言えます。歴史教科書の問題、従軍慰安婦の問題、在日韓国・朝鮮人の人権問題などは、次の世代に持ち越してはならない課題です。今こそ、解決への手を打っていかねばなりません。問題の根底には、人間が本能的に持ち合わせている「差別意識」、あるいは「マイノリティー(少数派)への優越感」などが含まれております。それらは今なお戦火を交える世界各地の紛争にも、共通した底流ではないかと思えます<sup>32</sup>。”

“今、真の「韓日友好の花」を育てるためには、どうしても公正な歴史認識が不可欠なのである。過去の権力者が日本人の体内に植えつけた「隣邦の民族への偏見」という毒草を、徹底的に駆除し、根絶しなければならない。そうしなければ、日本人の人間性の回復はできないだろう。韓日友好は、だれのためでもない。第一に、日本人自身の魂の浄化のためなのである<sup>33</sup>。”

差別意識を根底として、近現代において韓国・朝鮮半島に対する日本の偏見や無視・無関心の態度そしてそのような「偏狭な国家主義」が醸成されて来たという。では、なぜ日本社会にこのような意

<sup>28</sup> 池田大作・趙文富『希望の世紀へ 宝の架け橋：韓日の万代友好を求めて』(徳間書店、2002年)および『人間と文化の虹の架け橋：韓日の万代友好のために』(徳間書店、2005年)。

<sup>29</sup> 「無窮花の国から：韓国教員大学総長権彝赫先生に贈る」(1987年8月3日)；「新しい千年の黎明：慶熙大学創立者趙永植博士に贈る」(1997年8月)；「四季の調べ 民衆の賛歌 文化の大恩人の国 尊敬する韓国の友に贈る」(1999年4月11日)；「韓日友好の碑」(1999年5月3日)；「敬愛する韓国の同志に捧ぐ」(2000年7月17日)。

<sup>30</sup> 主要な人物としては安昌浩・柳寛順・金マリア・金九・尹貞媛・韓龍雲・咸錫憲・安重根(以上、独立運動家)、世宗・金庚信・李舜臣・呂運亨(以上、将軍・政治指導者)、李珥・申師任堂・朴趾源・丁若鏞・姜沆・申維翰・尹東柱・羅憲錫(以上、学者・文化人)、崔承喜・金容植(以上、芸術家・スポーツ選手)等がいる。

<sup>31</sup> 『人間革命の世紀へ：池田大作選集』(注27)；『평화의 아침: SGI회장이 말하는 한국 독립열사들(平和の朝：SGI会長が話す韓国の独立烈士たち)』(韓国SGI、2010年)；『감사합니다 한국(ありがとう韓国)』(朝鮮ニュースプレス、2012年)。池田の韓国関連の主張や行動をまとめた日本語文献としては尹龍澤「在日韓国人の地方参政権問題についての一考察：池田大作先生の人権思想を知る一つの手がかりとして」創価大学通信教育部学会編『創立者池田大作先生の思想と哲学』1巻(第三文明社、2007年)。

<sup>32</sup> 趙文富・池田大作『前掲書』(2002年、注28)262項。

<sup>33</sup> 「人生は素晴らしい：第5回李寿晤昌原大学総長」『聖教新聞』(2002年5月25)。

識や態度が再生産されてきたのか。池田は明治以降の脱亜入欧路線という日本政治の大枠も問題ではあるが、より重大なこととして、人間性を軽視した「歪曲された教育」、さらにその背景にある、そのような「哲学の不在」を根本的な原因と見ている<sup>34</sup>。そして、この思想・哲学の再構築を日韓関係の課題のみならず、日蓮仏法を信仰する創価学会が目指す普遍的目的の文脈でとらえている。例として、忠清大学からの名誉教授推戴式と創価学会7・3記念幹部会を同時開催した際の池田のスピーチでは、師匠である戸田が戦時中に信教の自由を固守したために投獄された体験を踏まえて、日韓関係の根本的問題の解決と創価学会の目指すべき道を、次のように明確に結びつけている。また代表作である『新・人間革命』の中でも、在日韓国・朝鮮人が抱える日本での生活の困難さに関し、その解決と創価学会の理想とを深く結びつけている。

“獄中体験のいちばんはじめに描かれた出来事は、いったい何であつたか。それは、罪もない貴国の一人の青年が、理不尽に侮辱され、拷問されている光景だったのであります。文化の大恩ある隣国の民衆を、日本の国家権力が、いかに非道に苦しめ続けてきたか。この罪は、永遠に消えるものではありません。戸田先生は、血涙を絞りながら、憤怒しておりました。思えば、牧口先生も、貴国に国家神道の信仰を強制した日本の傲慢に激怒し、対決していきました。創価の人権闘争は、貴国はじめアジアの民衆と、最も深く強く連帯するところから出発しているのであります。(中略)要するに、日本の「国家主義」に屈服しない、確かなる「人間主義」の平和勢力を拡大していく以外にありません。そうでなければ、真の「韓日友好」もあり得ないし、アジアとの本当の信頼関係も結べない。また、日本は世界の孤児となって苦しむことになるでしょう。その意味からも、日本の柱たる創価の正義の連帯は、いよいよ力強く、いよいよにぎやかに、すべてを勝ち越え、乗り越え、断じて勝利の前進をしてまいりましょう<sup>35</sup>。”

“戦後の、日本政府の在日韓国・朝鮮人への冷酷な対応もさることながら、日本人の根強い偏見と差別の意識も変わらなかった。(中略)彼(戸田)は、常に民衆の幸福を念願していた。それが、創価学会の目的であつた。学会が弘めんとする日蓮仏法は、人種、民族、国籍、性別、年齢等のいかににかかわらず、すべての人が、必ず幸福になる方途を説き明かした生命の法理であるからだ。すべての人が幸福になる権利をもっている。いな、最も苦しんだ人こそが最も幸せになる権利がある。それを実現してきたのが創価学会である<sup>36</sup>。”

このような思考、つまり、社会的問題の温床としての人間性に関する思想・哲学の不在と日蓮仏法の信仰活動の重要性を結びつける考えを、韓国・朝鮮半島に即して深く論じたものとして、戸田が1951年5月に発表した「朝鮮動乱と広宣流布」という論文がある。戦時の日本および朝鮮半島にて、なぜ戦争の災禍が繰り返されたのかの問題に対し、戸田は仏法の観点、特に法華経および立正安国論で説く「仏の不在」という観点・教義から考察し、「この騒乱のすがたこそ、日蓮大聖人の仏法が東洋に広宣流布する兆し」であるため、「かつて仏法を我が国に伝来させた朝鮮に、大聖人の仏法を渡そうではないか」との実践的結論に至った<sup>37</sup>。池田はこの戸田思想に対する熟考を経て、日本の敗戦-朝鮮戦争-講和条約と至る戦後処理に関する考察の結論として、「人間の一念を転換し、仏の生命を顕現していくことが平和建設の要諦」であるとした<sup>38</sup>。平和とは制度や同盟等によって完全に達成できるものではないことも含め、より深い精神的レベルでの変化・発展に目を向けている。

では、日韓関係とは具体的にどのような方向や姿を目指すべきであるのか。これに関し池田は、国家・地方・社会レベルでの交流拡大や個別的な政策・制度的改善等も提案するが、「真の韓日関係」の構築を一貫して訴えている。このことは上の引用文にも表れている。具体的にこれは、幸福を目指した民衆の連帯であり、特に人間や生命の尊厳性・平等性を自覚し、その実現のために能動的に生きる人々の連帯である。そのような「新たな文化」の形成を日韓の連帯に期待し、それ自体が「世界平和へのモデル」となると展望している。

“韓日友好とは、単に二国間の関係性を指すものではなく、その帰結がそのままアジアの安定と世界平和へのモデルとなり、世界市民の在り方への大いなる示唆となることは、間違いありません。両国のこれからの

<sup>34</sup> 「恒久平和へ対話の大道を」第11回「SGIの日」記念提言(1986年)；慶熙大学名誉哲学博士号授与式でのスピーチ(1998年5月15日)『人間革命の世紀へ：池田大作選集』(注27)。

<sup>35</sup> 韓国・忠清大学名誉教授推戴式兼7・3記念幹部会スピーチ(1998年7月4日)『池田大作全集』89巻(2001年)。

<sup>36</sup> 『新・人間革命』8巻(聖教新聞社、2000年)。

<sup>37</sup> 戸田城聖「朝鮮動乱と広宣流布」『大百蓮華』5月号(1951年)；『小説・人間革命』5巻(聖教新聞社、1969年)123-124項。

<sup>38</sup> 『小説・人間革命』(前掲書)141項。



歩みを、世界が注目しているからです。(中略) 韓日両国が、さらに友好を深めながら、互いの文化の善の力をさらに発揮し合っていくことは、必ずや世界の文化を豊かにする一助となっていくと信じます。ゆえに、これからも、アジアと世界を見据えつつ、両国の文化と教育の交流に尽力していく決心です<sup>39</sup>。”

このような思想は、韓国の識者や在日二世の創価学会員らへ向けての池田のメッセージにも一貫して表れている。民衆の幸福の道を開くことが韓日友好の道・世界市民の共生の道・人類の平和と繁栄の道へと繋がること<sup>40</sup>、地球人として、広々とした心で、生涯、創価学会から離れずに、人びとのために生きることの中に本当の幸福があること等である<sup>41</sup>。さらに、「真の韓日関係」の理想的姿として、日本及び韓国においてそのような思想である日蓮仏法を实践する創価学会員の連帯・広まりを重要視している。例えば「韓日友好の碑」(長編詩)の中で彼は、「湧き出でたる地湧の同胞」が人道と正義の韓日新時代への敢闘の前進を始め、それがアジア・世界へ広がることを願うと記した。このような理想像の文脈において、池田が何度も繰り返してきた主張は日本・日本人にとって韓国が「文化大恩の国」であるという認識である。これは、農耕・衣食住・芸術・学問・社会制度等、歴史的に朝鮮半島から受けた数々の文化的な恩恵を日本は忘れるべきではないという主張でもあるが、その中でも特に「絶大なる恩恵のなかの大恩」としての仏法の伝来を指す<sup>42</sup>。それに実践的に報いることとして戸田は、仏法思想の核心としての人間・生命の尊厳性・平等性を深く説いた日蓮仏法を再び朝鮮半島へ渡すことを明確に主張した。これを受けて池田が「文化大恩の国」という場合、基本的にはその受け取り側である日本・日本人へのメッセージという性格が強いが、彼の時代ではそれを朝鮮半島の地において実質的に拡大・実践するのは朝鮮半島の民衆自身であると励まし続けてきたこともあるため、その本質的な意図は上記した「真の韓日友好」と一致すると言える。

まとめると、池田は日韓対話を多角的に重ねてきており、大きく4つのテーマに分類できると指摘したが、内容的にある程度一貫したメッセージを読み取れる。差別や悪等の対極にある人間・生命の尊厳性・平等性といった普遍的価値の重要性から出発し、それは制度的にあるいは他者から保障されるというよりは、人々が能動的に自覚および実践していく性格のものであり、そのことを最も深く説いたものがアジア・韓国を通して日本で形成された日蓮仏法であると認識する。韓国の多くの独立運動家や歴史上の人物もまたそのような普遍的価値の実現のために命を懸けて闘争してきた。近現代の日韓関係上の侵略や差別といった重大問題の根本的原因はこのような思想・哲学の不在にあり、またその理想的な姿とは、その実践的回復である。このことを池田は人間性の回復や幸福そして創価学会の目的や文化大恩等として主張してきた。細かな政策的課題も論じているが、何よりも池田は、日本人・韓国人の1人ひとり、そして両民衆に対して、そのような生き方を期待し、日蓮仏法の広がりとしてのこの第一歩が、ひいては世界平和の起点になると展望している。

### (3) 対話を通じた共感の形成：

上記した池田思想の特徴をより明確に確認するために、3人の代表的韓国識者が池田との対談を通して得た「結論」を紹介する。

(趙文富、池田の済州島訪問を受けて) “その時、私はこう思った。戦争のない状態が平和なのではない。日常の人間関係の中で、穏和な品性からにじみでる真心の笑顔によって、周りが幸せな気持ちを感じるほど、相手のことを尊重していく心と心の交わりこそ、本当の平和の姿であり、平和の根源ではないかと<sup>43</sup>。”

“池田会長が、韓国のことを「文化大恩の国」と讃えてくださったからこそ、日本人のみならず、私たちもまた、相手の国の人に感謝できる「価値創造の人間」へと成長する方途に、気づくことができたのです。また池田会長は、日本人だとか韓国人だとかに関係なく、全人類が、そのような人間になることを、切に願っているというのが、私の「結論」となったのです<sup>44</sup>。”

(李壽成) “池田先生のまなざしは常に民衆に注がれてきました。政治的立場や経済的利害を超えて 民衆が幸福な世界を築かねばならないというのが池田先生と創価学会の精神であり、それは創価学会の初代会長牧口先生が軍部に反対し獄死された信念の姿からも確認することができます。(中略) 国と国の間の葛藤を解

<sup>39</sup> 趙文富・池田大作『前掲書』(2002年、注28)262項。

<sup>40</sup> 韓国・慶南大学名誉教育学博士号授与式での謝辞(2015年9月21日)。

<sup>41</sup> 『新・人間革命』24巻(聖教新聞社、2012年)。

<sup>42</sup> 『新・人間革命』8巻(注36)。

<sup>43</sup> 趙文富・池田大作『前掲書』(2002年、注28)9項。

<sup>44</sup> 趙文富・池田大作『前掲書』(2002年、注28)275項。



消するためには政治、経済、外交、安全保障の次元などでのアプローチも大切ですが、池田先生が言われている通り、もっと根本的な解決策は、民衆の間で交流を広げていくことだと私は信じています<sup>45</sup>。”

(趙永植) “21世紀は、ものすごく難しい世紀です。本格的な変化の時代です。変化それ自体が、いいいものであると漠然と期待している人が多いが、そうではない。人間性が破壊された、とんでもない世紀になる危険があります。(中略)何とか歴史の方向を転換しなければならない。そこに今、心血を注いでいるのが池田会長と私なのです。” “池田先生の言葉の通り、人類は一家族にならねばなりません。先生の人間革命と私の人間中心主義は、文字は違うけれども思想は同じです<sup>46</sup>。”

3人は共通して、平和を目指すことはもちろん重要であるが、その内実あるいは過程において、人間あるいは民衆が能動的かつ連帯して、真の幸福や人間性を追求する生き方の重要性に共感している。以上の議論を通し、本稿では日韓対話において表れた池田思想の特徴を「平和を内包した幸福思想」と暫定的に解釈する。言うなれば池田思想とは、幸福を究極かつ遠大な目的とし、その過程に日韓関係を含む世界平和に関する具体的課題を細かく組み込むものである。このような幸福と平和の関係性は、池田による表現やニュアンスの問題と見れるかもしれないが、特に対談者の実感をこのように引き出したことは事実であるため、その思想的特徴として注目するに値すると考える。

ところで、池田が言う幸福とは、それが人間性の回復や哲学の不在等の表現と共に用いられるように、単なる気楽な人生や個人的満足、物質的な繁栄、欲望の解消等を意味するものではない。創価学会の教義や日蓮仏法においても、これは最重要キーワードの1つとも言えるため、その意味に関して注意が必要である。紙幅の制約もあり細かく論じることはいできないが、象徴的な教義用語として、「自他共の幸福」や「絶対的幸福」等が挙げられる。また「自分だけの幸福も、他人だけの不幸もない」という表現も池田はよく使う。端的に言えば、この文脈における幸福とは、自己のみならず、他者の救済や成長を真摯に望み、そのために能動的に努力する姿勢や結果であり、また、自身がどのような状況にあらうと、そのように意識し行動できる人間としての「生きていること自体の喜び」を自覚するようなイメージである。また、社会的または精神的な悪に立ち向かう闘争的なイメージも含まれる。教義的にはさらに、幸福とは生命力であり、仏界という心の状況(境涯)であり、小我から大我への自我の拡大である等との深い解説があり、その根本的レベルにおいては、宇宙的秩序に合致しようとする祈りや信仰的行為と直結する。池田の先師である牧口は、他者と共に幸せになるということこそ、誰にとっても、どの時代においても、人生の最高・最大の目的であり、その下にその他全ての中小の目的が合理的に位置づけられると説明した<sup>47</sup>。さらにそのような「大善生活」を送る根本的な形態が日蓮仏法の実践であるとした。こうして見ると、民衆の幸福を最高目的とし、その過程において日韓関係の課題を論じる池田の観点は、まさにこの牧口思想の活用であり、上述した戸田思想の具体化であり、それらの土台となる法華経・日蓮仏法の幸福思想の展開として理解できる。

#### 4. 平和を内包した幸福思想：韓国および一般的な創価・池田研究への含意

##### (1) 韓国の創価・池田研究に対する含意

では、このような思想的特徴は、前に整理した韓国における創価・池田研究の現実的動向に対してどのような意義を持つだろうか。以下に4つの点を指摘する。

1つ目に、積極的平和という概念的枠組みの中でのみ池田平和思想を論じること、さらには「平和」をその究極的目的と設定し、幸福や人間性をその1つの要素としてのみ扱うことの限界が指摘できる。確かに池田の主張は、積極的平和概念と多くの点で一致し、平和を目指すこと自体にももちろん間違いはない。しかし、結論として頻繁に重要視される民衆連帯や人間革命運動等は、平和実現のた

<sup>45</sup> 李壽成「アジアの平和の連帯を目指して」『東洋学術研究』57巻1号(2018年)165項。

<sup>46</sup> 「韓国と日本が力を合わせて文化世界の創造を：韓国慶熙大学創立者趙永植氏」『21世紀と人生を語る：世界の有識者との対談集Ⅰ』（聖教新聞社、2000年）264項、267項。趙永植は1948年の『민주주의 자유론(民主主義自由論)』、1951年の『문화세계의 창조(文化世界の創造)』、1975年の『인류사회의 재건(人類社会の再建)』、そして1979年の『오토피아(オートピア)』等の著作を通して、一貫して人類社会の難題の解決のためには、理性と感情を統整し、人間が本来持つ人格力を発揮していく必要性(人間中心主義)を訴えてきた。またそれを宇宙次元の相互連関(相乗和)の中における人間的存在の本来の役割とする思想(主義生成論)を展開した。

<sup>47</sup> 牧口常三郎(古川敦訳注)『創価教育法の科学的超宗教の実験照明』（第三文明社、2023年）125-137項。

めの「手段」や「戦略」ではなく、それ自体が「自他共の幸福」観から直接導かれた最重要の目的性・信仰性を持つものとして理解すべきである。これに関し、韓国の劉光錫は池田思想を始め、宗教的な平和論を平和学上の積極的平和概念と同一視すべきではないと指摘している<sup>48</sup>。カナダの平和学の権威ラバポートも「世界の平和運動の多くは核兵器と戦争への恐怖から生まれたものですが、SGIは平和とは人々の喜びと幸福が実現することであると、一步深い次元から平和運動を進めています」と指摘した<sup>49</sup>。また、別の角度として、戦争・核兵器を「絶対悪」として断固反対した池田の語調を相対的に過小評価してもいけないであろう。日本での研究動向を見ると、やはり池田思想と積極的平和概念との関連性には注目するが、それを越えた対案的平和観を模索する傾向が確認できる。例えば中山は池田平和思想をガルトゥング流の「積極的平和観」とガンジー思想に通じる「絶対的平和観」そしてカント思想とも関連する「能動的平和観」を合わせ持つものを見ている<sup>50</sup>。川田は人間の内なる精神・コスモスの発露としての人間革命運動を通して、政治・経済・社会を変革し、積極的平和を実現していくビジョンを「根源的平和論」と指摘した<sup>51</sup>。高村は池田平和思想の本質的特徴を①深遠な人間主義、②創造的・建設的ビジョン、そして③人々に規模を与える樂觀主義とし、単なる「学問的理論」の次元には収まらないものと捉えた<sup>52</sup>。韓国の研究においてもこのように平和論を革新させるか、それとも幸福思想や信仰的理解をより深く取り入れるか、何らかの方向性の改善が必要と思える。

2つ目に、韓国では新宗教としての創価学会の特徴として、公共的宗教や幸福協創といった理論的解釈が登場しているが、これらアプローチは「平和を内包した幸福思想」と似ていて、幸福や信仰の延長線上に公共的道德や世界市民・世界平和等の促進を見出している。つまり、これらは上記の積極的平和論を補完するカギと成り得る。しかし、同時にこれら自体は未だ初期の研究段階に留まっていると言える。例えば、池田は生命や人間性の理解に関し、「日蓮仏法こそが最も深い教え」であり、それが22・23世紀に向けて段階的に展開するという立場であるが、既存研究はこれを真剣に受け止めているわけではなく、他の理論や概念を持ちいて、分かりやすく言い換えることに研究の焦点や範囲を留めている。これら理論的解釈が文化大恩や東洋広宣流布といった創価・池田思想の固有の展開と論理的に結び付くのかも不明である。さらに、創価・池田思想が平和の領域やその政策論に深く入り込んでいることにも留意が必要である。特にこのことは「平和を内包した幸福思想」自体が持つ問題でもあり、次節にてまた触れる。

3つ目に、やや重複する指摘ではあるが、「平和を内包した幸福思想」という解釈は、一方では既存の平和思想研究に対して幸福や信仰の要素をもっと加味すべきことを要求し、他方では既存の幸福思想中心の研究に対し、その哲学的固有性や平和とのつながりに留意すべきことを要求する。これらは結局、創価・池田研究において、その中心的要素としての幸福と平和の関係をより深く理解すべきことを示唆する。言い換えれば、その思想を内容的に体系化していくことが、細分化している研究の相互補完や革新につながると展望できる。これに関し、上記した既存研究の中には思想の全体像を展望したものはいくつかある。金鐘萬は池田思想全体を木に例え、根っこが宗教思想、幹が生命思想、枝や果実として教育・平和・人権思想が広がっていると展望した<sup>53</sup>。権賛皓は人間性の拡大という幸福観を根本に、重層的連帯や相互依存的制度を構造とし、教育・文化運動や提言活動をその実践として、池田の平和理念の構図を提示した<sup>54</sup>。しかし、どれも特徴や要素間の関係を深く説明しているとは言い難く、全体像に関する再解釈に到達しているわけでもない。一方、体系化という課題に関して日本の動向を見ると、少なくとも2種類の方向性がある。1つは関連領域やテーマを列挙するものであり、もう1つは思想の独自の本質とその系譜を整理する、より深い体系化である。この内後者に関しては特に松岡がリードしているようである。生命に関する智慧・真理・慈悲を説く日蓮仏法の独特な思想が、牧口価値論・戸田生命論・池田人間論として実践的に展開してきたと理解し、この上で池田思想の特徴をさらに細分化し<sup>55</sup>、現代において展開するこの思想の全体的体系を「創価信仰学(創

<sup>48</sup> 劉光錫「前掲論文」(注23)187項。

<sup>49</sup> 『聖教新聞』(2001年7月7日)。

<sup>50</sup> 中山雅司「池田大作の平和観と世界秩序構築についての一考察：人間・非暴力・民衆をめぐる」『創価教育』5号(2012年)。

<sup>51</sup> 川田洋一「仏教平和論の特質：文明間対話における仏教の貢献」『東洋学術研究』52巻1号(2013年)。

<sup>52</sup> 高村忠成「池田先生の平和思想の形成と構造」創価通信教育学部学会編『前掲書』(注31)。

<sup>53</sup> 金鐘萬「前掲論文」(注19)100-101項。

<sup>54</sup> 権賛皓「前掲論文」(注23)。

<sup>55</sup> ①生命復権の思想、②自由自在の主体性の思想、③すべてを活かす思想、④変化の信仰の思想、⑤知恵に生きる思想と分類している。松岡幹夫『日蓮仏法と池田大作の思想』新版(第三文明社、2018年)。

学)」という新たな学問領域として打ち立てるところまで進んでいる。韓国の研究でも金溶煥が言う「個を活かす活命連帯」などは松岡の解釈に通じる点もあるが、このような高度な体系化にはまだまだ時間と労力が必要であり、今後、議論が活性化していくことを期待する。

4つ目に、創価・池田の幸福思想は、日本から東洋そして世界へという経路で広まるという特殊な具体性を持っている点に、韓国の研究者らはもっと注目すべきであろう。デジタル化時代において、思想自体は空間的な制限無しに拡散するかも知れないが、その幸福思想は、単に観念的なものではなく、一人ひとりの日蓮仏法の実践という現実的・地理的・長期的な展開を重要視し、その理想的姿は何よりも創価学会の発展として体现される。韓国・アジアはその国際的な出発点であり、日蓮仏法が普遍化する実証的なテスト対象としての重要性を持つ。創価・池田研究全般において、韓国において最も意義ある功績がなされるとするならば、このテーマであろう。実際に、日本を除く世界のSGI組織の中で韓国が圧倒的な規模であり、日本系宗教のみならず、キリスト教や在来仏教等を含めた「宗教市場」に関する比較・実証研究が活発に進んでいるため、このテーマに取り組む切り口は十分に存在する。これまで李元範らの実証的研究プロジェクトでは、特に入信動機や満足度の側面から韓国SGIの基本的特徴や発展要因を探究した。今後、幸福や平和に関する実践的理解や態度、国家観・民衆観・日本観そして社会変革観に至るまで、創価・池田思想がどれだけ、またどのように、一般会員の認識の中に体现・肉付けされ、受け継がれているのかを解明する努力に期待する。言い換えれば、「提供者側」ではなく「受容者・主体者側」からのより本格的な思想研究である。

## (2) 幸福と平和の関係に関する発展的考察：結論にかえて

最後に、幸福と平和の関係に関して補足する。このような言い方は一般の創価学会員にとっては奇妙に聞こえるかも知れない。というのも、どちらも明らかに重要な目的として広く認識されているからである。例えば、ホームページ上の紹介文の最上段には「創価学会とは、万人の幸福と世界の平和という価値の創造を目指します」とある<sup>56</sup>。会員が毎日の朝夕に行う祈りの共通事項を定めた「御祈念文」の最終文章は「世界の平和と一切衆生の幸福」を誓うことである。2015年にまとまれた池田の主要指導集のタイトルは『幸福と平和を創る智慧』である。幸福と平和はどちらが上か下かというわけではない。しかし、日本の関連研究では、どちらかと言えば平和思想が幸福思想に対し優勢と見える。どちらも共通して、九識論や十界論・依正不二論等の生命哲学から出発するが、幸福を主題とする研究は欲望やウェルビーイング・倫理等のキーワードと結びつき<sup>57</sup>、一方で平和は慈悲や共感・人間主義・世界市民主義・民衆連帯等と結びつき、池田思想のより広い範囲をカバーしているようである<sup>58</sup>。創価・池田思想が、1つや3つではなく、なぜこの2つの究極的目標に行き着くのか、その上で、これら2つはどのような関係にあるのかという基本的疑問は、意外にも説得力を以って答えられていないようである。両者の関係について、池田自身の代表的な説明を挙げると次の通りである。このテーマは特に「一身の安堵を求めるならば四表の静謐を目指せ」と主張した日蓮の『立正安国論』を巡って掘り下げられている。

“「一身の安堵」とは、個人の幸福を指します。「四表の静謐」とは、東西南北の四方の安穩、すなわち社会全体の平和のことです。個人の幸福を願うがゆえに、まず社会の平和を祈る。そのために真剣勝負で行動する。この両者を追求し、実現しゆくのが真の宗教です。惑星の運行に譬えるならば、「一身の安堵」とは「自転」であり、「四表の静謐」とは「公転」に当たります。自転と公転が運動して、大宇宙の調和の軌道が成り立っている。どちらか一方だけということはあり得ません<sup>59</sup>。”

“大聖人の仏法は、あくまでも民衆の生活のなかに躍動する文化の大海でなくてはならない。個人の内面の変革をとおして時代をリードするものであり、全人類の生命にひそむ魔性に挑戦し、悲惨と苦悩を絶滅することが仏法の本意であります。(中略) 横には全世界、全人類の崩れざる平和、縦には未来永遠にわたる生

<sup>56</sup> 創価学会「創価学会とは」<https://www.sokagakkai.jp/philosophy>.

<sup>57</sup> 吉川成司「ポジティブ心理学におけるウェルビーイング理論の展開と池田思想における幸福観」創価大学通信教育部学会編『池田思想研究の新しい潮流』(第三文明社、2016年)；叢暁波「時代の精神状況から見た池田大作幸福思想の三つの領域」『創価教育』13号(2020年)；川田洋一「現代文明と欲望論：仏教幸福論の視座から」『東洋学術研究』49巻2号(2014年)。

<sup>58</sup> 中山、川田、高村等の研究(注50-52)以外にも前川健一「仏教の平和思想とSGI」『東洋学術研究』44巻2号(2015年)；松岡幹夫『現代思想としての日蓮』(長崎出版、2008年)。

<sup>59</sup> 『御書と師弟』2巻(聖教新聞社、2010年)。

きいきとした幸福の確立こそ、日蓮大聖人の終極の目的なのであります<sup>60</sup>。”

日韓対話においては、民衆の幸福を目指す思想が韓国の識者との共感を深める上で重要な役割を果たした。それは、誰もが同じように主張する「平和」とは異なり、「自他共の幸福」を社会的にも信仰的にも究極の目的として追求することが平和にもつながるという独創的な思想として解釈できる。本稿はこのような解釈をカギとして、韓国における既存研究の発展や相互補完を促す方向を指摘した。しかし、上記した創価学会の基本的立場や池田の説明では、思想の全体的特徴として幸福と平和のどちらか一方を重視するような解釈は成立しないように思える。池田の説明に見て取れるように、その関係を適切に理解するためにはより遠大なスケールが必要であろう。本稿での議論はそのレベルにははるかに及ばない。「平和を内包した幸福思想」という解釈は、韓国での研究発展のための一つの経由地点として、暫定的に示したに過ぎない。

---

<sup>60</sup> 「人間勝利の大文化を創造」（1970年5月3日、第33回本部総会スピーチ）『池田大作講演集』3巻。